

第3回：「鶴見和子と生活記録運動」

2006年11月15日（水）

趣旨説明：西川祐子

連続シンポジウム全4回のうち、今日の「生活記録運動」はもっとも親しみやすいテーマであると同時に、それぞれにたいしてもっとも深刻な問題提起がなされる問題ではないかと思われます。

生活記録運動は、生活綴り方運動とも呼ばれます。初等、中等教育では作文という文章を書かせる教育を20世紀前半までは「綴り方」と呼んでいました。生活綴り方、つまり自分の生活を生活者自身が言葉化し、文章化して他人に伝える能力を開発する教育は大正期から昭和も戦前の時代におこりました。戦後、それもちょうど占領期がおわる時期に生活綴り方教育はふたたび盛んになり、無着成恭編『山びこ学校』という、中学生が自分の村の生活を自分でフィールドワークした記録集、あるいは他人が読むにたえる調査報告集がうまれ文学としても名著とされました。

鶴見和子は、1952年の作文教育全国協議会に招かれた機会に『山びこ学校』を読んで衝撃を受け、二つのことを考えます。ひとつは、中学生が『山びこ学校』でやったことを、大人の自己確認、自己変革さらにはお互いに啓発する集団の自助運動にしたらどうだろう、という考えでした。第二には、研究者としての自分は今まで「自分を含まざる集団」の研究を行ってきたことに気付かされ、これからは「自分を含む集団」の研究をするという決意でした。考えたら即実行に移すのが鶴見和子です。このときも早速に自分のこの発見を作文教育全国協議会で話し、とくに「自分を含む集団」というキーワードが会場いっぱいの大聴衆の琴線にふれて、この言葉はその日の討論のなか、さまざまな人の発言のなかでくりかえされ、まるで山彦のよう

京都文教大学人間学研究所 連続公開ミニ・シンポジウム
協力：京都文教大学図書館

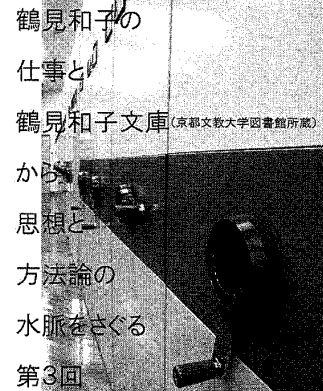
第3回（全4回） 「鶴見和子と生活記録運動」

- 1 主催校所 西川 祐子（本学人間学研究所長）
- 2 講演「生活記録運動の意義」
中谷 いずみ（日本大学文学部国文学科助手）
- 3 講演「鶴見和子のフィールドワーク」
杉本 恵子（本学文化人類学専攻教授）

司会 松田 真澄子（本学臨床心理学専攻准教授）

2006年11月15日（水）
13：00～14：30（昼食アワー）
会場：指月ホール（本学 光臨館1F）

お問い合わせ：京都文教大学人間学研究所
〒612-8501 京都府宇治市南門外1-1-1
電話 0774-25-2881
FAX 0774-25-2882



であった、とは私が偶然に別の調査で聞き取りをしていたときに当時中津川で作文教師をしていた現在80代なかばの方から聞いた話です。

そのお話をうかがったとき、わたしはじつはとっさに言うに言われぬ一種の違和感をもちました。なぜならわたし自身は個人的には文学研究から女性史研究、女性学研究そして現在はこの京都文教大学でジェンダー研究に従事しています。わたしの場合、最初から自分と自分を含む集団の研究であった。おおげさに言えば、この問題を解くことができなければわたしは生きてはいけな、それが近代家族論になったり、比較文化論になったりしたわけです。女性史研究はまず自分と自分の母親と自分の祖母の人生を考えるとところからはじまりました。ついで他の社会、他の時代ではどうであったのかと考えました。さらには家内領域でおこっていることはじつは政治経済、そして社会思想、哲学の問題なのだと、ここまでの私の進んできた道です。これは「自分を含まざる集団」研究から「自分を含む集団」の研究へと歩む鶴見和子さんとは逆の方向です。何がどう違うのか。近代の啓蒙の時代の知識人の教え導く役割と大衆社会の研究者の学び記録しフォローする役割の違い

いということはたしかに言えそうです。戦後の女子学生は、物言わぬ他者であった女性が表現手段を手に入れ、その喜びをこころから感じていたとおもいます。わたしたちはひょっとしたら現代大衆社会のネーティヴ・アントロポロジスト、原住民にして人類学者、つまり観察されていた原住民が口をひらいて自らを語り出したというような存在であったのかもしれませんが。生活記録運動の文集のことばに胸をうたれるゆえんです。

しかし、見られるがままに、命じられるがままになっていた存在が相手に視線を返し、発言を返すとたんに、主体をたちあげたとたんに、新たな問題が生れます。自分の意思をもち物言う主体は自らの意思で積極的に能動的にある集団をたちあげ、おなじく意思的に積極的に集団外を、あるいは内部の異質な分子の排除をはじめるという問題です。鶴見和子はこれらの困難な問題をひるまずにわが身にひきつけて考えた実践的社会学者です。とうぜん挫折もあれば敗北感にさいなまれることもありました。私たちはひたすら前むきの鶴見和子さんからと同じく、反省と再出発をやめることのない鶴見和子さんから学ぶべきことが多くあるように思います。

講演：「生活記録運動の実践」

中谷いずみ

1、はじめに

生活記録運動は、1951年3月に刊行された無着成恭編『山びこ学校』（青銅社）の好評や生活綴方教育の隆盛に端を発する。『山びこ学校』の刊行によって、教育界のみならず分野を超えて広くその意義を知らしめた綴方教育は、「第一回作文協議会」（1952年8月1日から3日間、於岐阜県中津川市）を開催、全国の綴方教師たちを中津川に結集させるに至る。興味深いことに、そこには、当時『思想の科学』で大衆文化の分析を積極的に行っていた鶴見和子も参加していた。無着成恭に会いたい一心で「協議会」に参加したという鶴見和子は、「もっとも手近で、切実なもんだい」を教師も生徒も一緒に「考えあい」、「まちがって

いたところを、なおしあってゆく」ことで「自己改造」していく綴方教育の方法に感銘を受け、「子どもだけでな」く、「大人がうまれかわるために、とくにインテリも学者」にとっても「生活綴方的自己教育」が必要だと考えるようになる^(注1)。そして、いち早く「大人の綴方」を実践していた東亜紡織泊工場に出向き、綴方を実践する人々との交流を深めた鶴見は、「生活をつづる会」を立ち上げるなど自らも生活綴方運動に身を投ずることとなるのだ。ここでは、鶴見和子が参加していた「生活をつづる会」の編著に依りながら、大人の生活綴方と呼ばれた生活記録運動がどのような運動であったのか、またどのような可能性を有していたのかについて考えていきたい。

2、「実感」と「知識」

「生活をつづる会」の文集として刊行された『エンピツをにぎる主婦』（1954年9月毎日新聞社）の序文には次のように記されている^(注2)。

それぞれに、自分の苦しみを、ひとりで心の中にあたためて、くよくよしていたのです。ところが、ざっくばらんに話しあったり、書きあったりしているうちに、自分の苦しみが、他の人たちの苦しみに、つながっていることを、実感として感じあうようになりました。自分ひとりでは、どうにもならないけれど、みんなといっしょに、どうにかしていこう、という気持ちになったときに、わたしたちのあいだから、あたらしく生きようとする姿勢が、生れてきました。

鶴見和子は『朝日新聞』の「ひととき」欄について述べた文章の中で「出てきた共通の問題について、話しあいをつみ重ねてゆく集りをつくって」いくことでしか、即ち「"持続"と"集団"をとおしてでなければ解決できないこと」が「わたしたちの日常生活に」はたくさんあると記しているが^(注3)、それを具現化し得る方法として生活記録運動が見出されていたことは、この序文からも見てとれるだろう。つまり生活記録運動

は、「自分の苦しみが、他の人たちの苦しみに、つながっていることを、実感として感じよう」ことのできるような「集団」の「持続」によって、現状を「どうにかしていこう」とする、まさに実践的な試みとして紹介されていくのである。例えば1954年8月の『思想の科学』に掲載された「写真特集 生活綴方ができるまで」には、身を寄せ合って座る数人の女性たちがその中の一人の話に耳を傾けている様子や、店先で買い物をしたり、ミシンの横で何かを書き付ける女性の様子を収めた写真と共に、『エンピツをにぎる主婦』の書き手たちの文章が署名入りで掲げられている。この特集は同書の刊行直前になされたものであり、宣伝を兼ねたものだったことは言うまでもないが、割烹着姿の女性たちが狭い空間に詰め合って座り、話し合っている写真（図1）などは同誌の読者にインパクトを与えただろう。そこに掲載されたとりどりの文章、机に向かう時間がとれず家事や仕事の合間に綴方を書いていることや終戦後の貧しさから始めた内職のこと、あるいは日々の暮らしにおける心配事や職場に託児所を作るための運動のことなどを綴った文章の書き手は、主婦や勤め人、体調を崩して家に閉じこもりがちな女性や駄菓子屋のおかみさんなど、文筆を専門としていない、さまざまな立場の女性たちだった。『エンピツをにぎる主婦』の序文には「内職をしている労働者のおかみさん、山の手のインテリ奥さん、紡績工場で働く娘さん、会社の事務員、アルバイトをしている学生、学校の先生」（注4）と記されており、「生活をつづる会」が多様な階層からなる集団であったことをうかがわせる。これは生活記録運動の理想的なかたちでもあった。

例えば『エンピツをにぎる主婦』の中で、出版社勤務の夫を持つ「専門学校出の山の手の主婦」と紹介される栗田やす子は、「ここにいる人々は、みんな笑いころげながらも、忙しい職場、つらい職場、そして内職をもつ人々」であることを知り、「わたしはいったいなんだろう。何一つ生産的な仕事をしないただの主婦」にすぎないと戸惑い、ひけ目を感じながらも、自身が変化していくことで「集団」の一員とな

りつつある喜びを記している（注5）。

ひとりで書き直してもだめなんですね。みんなに批判され書いているうちに書けるようになったのです。それはただ書きかただけでなく、皆さんとの交流によって、わたし自身わたしのかきねを突きぬけ、ぶちこ



図1 『思想の科学』1954年8月



わして、すなおさに立ちもどりつつあるからでしょう。でもまだわたしは悲しいのです。ひけ目を感じます。わたしがたくましい生産者でないということは—

栗田の綴方は、メンバーとの「交流」の中で「自身」を変化させていくという綴方的「自己改造」を示すものであると同時に、階層を越えた「集団」の成立を示唆したものである。つまりここには、さまざまな階層に属する人々が形成し得る集団の可能性が提示されていたのだ。しかし一方で、栗田の綴方に記されている「すなおさに立ちもど」という書き手のありようが、生活記録運動が求める同質性と深く結びつくものであることもまた事実であろう。鶴見和子は「生活をつづる会」に属するタイプの違う二人の主婦（EとA）を例にあげて、次のように記している（注6）。

おなじ地域の主婦ではあるが、EとAとは、ちがった生活感情をもっている。Aは、いうことはすなおに、はっきりと、ずばりとした批判はするのだが、いざ書くとすると、「学者」ばりの論文口調がでてしまう。リクツっぽく、概念的になる。その点では、そぼくに、実感をありのままに書くEには、かなわないのである。かの女は、自分の欠点がよくわかっている。「わたしがつづり方の会に出席するようになりしたのは、学問を学ぼうというのでは全然なく、わたし自身がすこしばかりの本をよんだり、少しばかり多く文化財に接したことがあるなどということを、無意識にせよ態度に示すことが、この地域の人達とゆうわできない原因だということを悟ったからでした。（略）」

鶴見はここで、少し知識があるために、文章を書くと「リクツっぽく、概念的にな」ってしまうAは「そぼくに、実感をありのままに書くEには、かなわない」と述べている。もちろんこの文章の後には、「自分だけの経験」に「し

と、自分の経験のつながりがわからない」Eは、「Aのような人から、与えられるものが多いはず」という言葉が続くのだが、留意したいのは「わたし自身がすこしばかりの本をよんだり、少しばかり多く文化財に接したことがあるなどということを、無意識にせよ態度に示すことが、この地域の人達とゆうわできない原因だ」というAの言葉が紹介されている点である。ここには「本をよんだり」「文化財に接した」という経験を「そぼく」な「実感」に対立させて考える枠組みが存在している。このような、「そぼく」な「実感」に「立ちもど」ることを、「本」や「文化財」といういわば「実感」によって得たものではない「知」に対比させるまなざしは、「実感」と「知識」を両極のものとし、どちらか一方に真の価値が存在するかのように見なす遠近法を呼び込んでしまうのである。

3、女子工員からの問い

「実感」と「知識」を対立する二項と見なす枠組みは、当然のことながら、集団内部における文化的・経済的階層差を問題として浮上させることとなる。次の引用は「生活をつづる会」に参加している紡績工場の女子工員から受けた批判について、鶴見和子が記したものである（注7）。

さいきん、わたしに対して、ほんとうに親切な批判をしてくれた紡績の娘さんは、こういいました。「わたしたち紡績に働くものは、センチメンタルで、暗いのです。」

（略）鶴見さんの声、しゃべり方、からだ全体から受ける感じが、明るすぎるのです。『生活をつづる会』だって、そうです。あそこは、明るすぎるし、おもしろすぎるのです。だから、おもしろかったなあと思って、帰る途中、明日の現場のことを考えると、急に暗い気持ちになります。前の日に、耳糸をみんなきらしたまんまにしていたから、明日は一本一本つながなくちゃならない、そうすれば、明日は五〇ヤールも織れない、と思うと、とたんに悲しくなります。鶴見さんは、わたしたちのことが

頭の中ではわかっていて、それはこういうことだとか、ああいうことだとかいうけれど、ほんとうに、心の中では、わからないんだと思います。だから、わたしたちの毎日の暗い生活のことを、わたしたちが、もっとらくにきり出せるような場所に、この会をもっていかなければ、わたしたちの生活にはつながりません。」

女子工員は「生活をつづる会」が「明るすぎるし、おもしろすぎ」るために、その帰り道に「明日の現場のことを考え」て「急に暗い気持ちにな」ってしまうと言う。会の楽しさが工場労働の暗さを引き立たせてしまうという如何ともしがたいつらさを表した言葉といえるのだが、注目すべきは鶴見和子に向けられた言葉である。女子工員は鶴見に対し「わたしたちのことが頭の中ではわかっていて」も「ほんとうに、心の中では、わからないんだ」と述べ、「人の下で働き」「内職をし」「たくましく生きることのむずかしさに体あたりすること」を経験しなければ「わたしたちの生活にはつなが」らないのではないかと提言する。この言葉は運動に内在する矛盾を的確についたものと言えよう。つまり「そぼく」な「実感」に「立ちもどる」ことを重視する生活記録運動の考え方は、突きつめれば「体あたり」や「経験」を至上の価値としてしまうものであり、また、それぞれが「そぼく」に「立ちもど」った上で「つながっていることを、実感として感じあう」というスタイルは、メンバーに「そぼく」な「実感」主義という同質性の獲得を促すものともなり得る。更に表象という点で言えば、『思想の科学』の特集で紹介されていた割烹着姿のおかみさんの写真からも分かるように、「生活をつづる会」は「主婦」という同質性をメディア上で表明していた。さまざまな階層の人々の手になる文集のタイトルが『エンピツをにぎる主婦』となっていた理由について、同書の序文では次のように語られている（注8）。

この文集には、働く娘のつづり方のほうが主婦のつづり方よりも、数が多いのです。

それなのに、この文集の名前を、「エンピツをにぎる主婦」としたのは、いままでものを書くひまも習慣もなかった労働者の主婦が、書きはじめたということに、働く娘にもつらなる象徴的なみを、わたしたちの仲間が、感じたからなのです。

しかし「いままでものを書くひまも習慣もなかった」人たちを「象徴的」に表す「主婦」という言葉からはみ出してしまう、栗田やす子や主婦Aあるいは鶴見和子のようなメンバーもまた実際には存在していた。さまざまな階層を含む集団だった「生活をつづる会」は、「象徴的なみ」としての「主婦」という同質性を打ち出し、「知識」や「文化」と対極にある人々という表象を生み出すことで、「知」や「文化」に対するありようを自ら規制し、固定化してしまうのである。

4、生活記録運動のゆくえ

このように「知識」や「文化」との極北に想定される集団の同質性は、彼女たちの文章に、〈声をあげることのなかった人々の言葉〉というインパクトを添え、体験に根ざした「そぼく」な声の重みを広く知らしめていく。だが、それは一方で書き手の「知」のありようを限定し、「実感」を伴わないことは分からないという判断基準をもたらすことでもあった。こうした基準は、何も知らない（分からない）私という主体を立ち上げてしまいがちであり、またそのような主体は、自らを〈弱者〉の側に置ってしまうような論理を誘発してしまいがちでもある。例えば「生活をつづる会」を含む様々なグループが協力して刊行した『ひき裂かれて—母の戦争体験—』（鶴見和子・牧瀬菊枝編 1959年6月 筑摩書房）は、母親たちが綴った戦争体験を集めたものだが、その序文には「戦争によって」「きずあと」を負った「わたしたち」の体験を綴るという記述がなされており（注9）、「戦争」という大きな出来事に対する無力な〈弱者〉という語りが垣間見える。

だが、同書の中でより興味深いのは、末尾に付された「戦争体験年代史へのこころみ」であ

ろう。その中で、鶴見和子は次のように記している^(注10)。

四年ほど前から、生活をつづる会の古いメンバーで手分けして、新聞の縮刷をくって、とくに社会面を中心とした記事の書きぬきをしていた。また明治以来の教育にかんするくわしい年表もつくった。(略)そのころから、年表による個人体験のつき合せということを考えついた。生活記録の作品は、「自己完結的」であって「積み重ね合」わせることができないといわれている。(桑原武夫、「日本の教育者」・中央公論・一九五九・三月号)わたしたちの「戦争体験」についても、おなじ欠陥がある。そこで、わたしたちは、まず年表をつくり、それにもとづいて年代を追って共通のテーマを設け、テーマごとに具体的な回答をそれぞれが書き、それらの回答をつなぎあわせてみた。生活記録的方法をもちいながら、個別主観的な体験を、くらべあわせ、組み合わせることによって、いくらか組織化、客観化しようというところみなのである。戦争体験の個人的記憶から、庶民の戦争史にたどりつくまでの、ささやかな第一歩である。

「新聞縮刷」の「記事の書きぬき」や作成した「年表」による「個人体験のつき合せ」などにより「生活記録的方法をもちいながら、個別主観的な体験を「いくらか組織化、客観化しようというところみ」からは、「個別主観的」な「実感」と「新聞」などから得られる「知識」との融合を目指して模索するメンバーたちの姿を見てとることができるだろう。もちろん生活記録運動という一面に限って言えば、ここに記されているような試みが功を奏したとは、なかなか言い難い。だが、メンバーたちの間に浮上した問題や外部からの批判をもとに、よりよい方法を求めて行われる試行錯誤は、まさに生活記録運動の実践であったとも言えるだろう。そして生活記録運動とその後の市民運動との連続性を考えるならば、生活記録運動の実践

の中に芽吹いていたかもしれない可能性や限界に目を向け、それら一つ一つを丹念に検証し、論考していくことが必要なのではないだろうか。「実感」と「知識」とを対立させるまなざしは、決して過去の遺物ではないのだから。

注1) 鶴見和子「生活綴方教育にまなぶ」鶴見和子『生活記録運動のなかで』1963年1月 未来社

注2) 鶴見和子「はじめに」鶴見和子編『エンピツをにぎる主婦』1954年9月 毎日新聞社

注3) 鶴見和子「「ひととき」の「本と包丁」をめぐって」『朝日新聞』1953年9月1日

注4) 鶴見和子編「はじめに」『エンピツをにぎる主婦』(前掲)

注5) 栗田やす子「生活をつづる会のこと」『エンピツをにぎる主婦』(前掲)

注6) 鶴見和子「主婦と娘の生活記録」『生活記録運動のなかで』(前掲)

注7) 鶴見和子「話しあい、書きあう仲間」『エンピツをにぎる主婦』(前掲)

注8) 鶴見和子「はじめに」『エンピツをにぎる主婦』(前掲)

注9) 生活をつづる会「はじめに」鶴見和子・牧瀬菊枝編『引き裂かれて一母の戦争体験一』1959年6月 筑摩書房

注10) 鶴見和子「戦争体験年代史へのところみ」『引き裂かれて一母の戦争体験一』(前掲)

講演：「鶴見和子のフィールドワーク」

杉本星子

1. はじめに

本講演では、「鶴見和子のフィールドワーク」と題して、本学の鶴見和子文庫に所蔵された製糸・紡績女工を対象にした労働調査のフィールドノート資料を中心に、鶴見和子の初期のフィールド調査と彼女の研究におけるフィールドワークの意義について考えてみたい。

内容は大きく三部から構成される。第一は、鶴見の研究全体におけるフィールド調査の位置づけ、第二は、戦後すぐにおこなわれた製糸・

紡績工場でのフィールド調査について、第三は、生活記録運動と出会ったことによる鶴見和子の挫折感と初期の調査への反省がその後の研究に与えた影響である。そして最後に、文化人類学というフィールドワークを学問的方法論の基盤とする文化人類学の視点から鶴見和子のフィールド調査を改めて振り返ったとき、わたしたちが今そこから学ぶべき「価値としての共生」という思想について考察して結びとする。

1. 鶴見和子の「仕事」におけるフィールド調査

鶴見和子は、「わたしの仕事」という一文のなかで、自らの研究を戦前の社会哲学研究（1939年～開戦）と戦後の社会学研究（1945年以降）に、そして戦後の研究をさらに、アメリカ留学（1962年～1966年）を境に大きく前期（1945年～1962年）と後期（1966年以降）に分けている（注1）。

鶴見は、戦後すぐに「働く女性」を主な調査対象とした実態調査を行った。それが「働く婦人の意識調査」（1948年）と製糸・紡績女工の調査（1949年～1951年）である。この時期のフィールド調査は、社会の歴史性と個人の歴史性の相互作用を明らかにすること目的としていた。後述するように、鶴見は後年、この初期のフィールド調査を振り返って、「いやでいやでたまらない」と自己批判し、「生活記録をかく」という実践的な活動に移行することになる（1952年～1962年）。しかしここで重要なことは、そうした自己批判にもかかわらず、というよりむしろ、そうした自己批判を促したがゆえに、この初期の製糸・紡績女工を対象としたフィールド調査は、鶴見和子のその後の仕事の出発点ともいえる重要な役割を果たすことになったということである。また、この初期のフィールド調査のうちに、「伝記をきく」という調査項目がすでに含まれていたことにも注目したい。ライフヒストリーの聞き取りは、後に生活記録運動の中で生活史を書き読みあうという実践へ、さらには社会変動期における社会変化と文化の比較を目指した日本と中国の社会・家族構造の調査や、蒲生正男や青柳清孝などの文化人類学者を含む社会学、経済学など多領域

の研究者から構成されたカナダの日系移民の調査（1959年）における個人史の聞き取りへと繋がり、やがて鶴見自身によりライフヒストリー研究という社会学の方法論のうちに明確に位置づけられた。

鶴見の後期の研究には、（1）第二次世界大戦以前以後の日本の社会変動と個人の相互関係についての研究、（2）柳田国男の民俗学の再考、（3）水俣論、（4）南方熊楠論、（5）中国と日本の農村工業化の比較研究という5つの研究の流れがある。そこにおいて、「不知火海総合学術調査」（1976年～1983年）における水俣病患者のライフヒストリーの聞き取り調査や、中国上海の小城镇の調査などによる農村工業化の日中比較や九州大分県の一村一品運動などの村落調査（1987年～1989年）などが行われた。本報告では時間の都合で後期のフィールド調査について詳しい検討を行うことはできないが、留意しておきたいのは、鶴見の後期のフィールド調査が、地域に暮らす人びとの一人ひとりが国家の開発政策や環境運動のような社会運動と関わってゆくことにより、そこから新しい地域の歴史が作られていくことに注目するものであったということである。鶴見はこれらのフィールドワークをとおして、個人が国家政策に対峙し社会運動に参画するなかで地域社会史が構成されていく状況を明らかにすることにより、社会変動と個人という研究テーマを深化させた。また、こうした村での社会調査は鶴見の内発的発展論の理論的な構築の基盤となる事例研究として重要な役割を果たした。

鶴見和子の内発的発展論は、こうした地方都市や村落におけるフィールド調査と、そして日本の生活文化すなわち民俗というフィールドにしっかりと根ざした柳田や熊楠の理論研究と、鶴見自身の日常生活というフィールドにおける生活記録運動をはじめとするさまざまな実践活動という、いずれも「生活の場」をフィールドとした3本の研究の柱を土台として構築されたのである。

2. 紡績女工のフィールド調査

それでは初期の製糸・紡績女工のフィールド

調査に焦点をあてて、鶴見和子のフィールドワークについて、もう少し詳しく見てゆくことにしよう。

鶴見和子の戦後の研究は、戦争への深い反省にたち、どうしたら民主主義社会をつくることができるかという問題意識にたって行われた。鶴見は戦前の修身教育や軍隊教育を、国家のため、天皇陛下のために死ぬことができる子どもたちを育てる「死の社会化」であったと述べる。これに対して、敗戦後の民主教育は、人びとが平等で幸せに生きる社会をつくる子どもたちを育てるだけではなく、戦前の教育やしきたりを引きずった大人もまた、自己を作り直す「生の社会化」を目指すものでなくてはならないと考えた^(注2)。鶴見は、組合やサークル活動こそが、そうした大人の自己再形成のための教育の場となりうるし、そうあるべきだと考えて、組合運動に参加した。1948年に鶴見が服部籠江とともにおこなった東京都および近県の機器、通信、紡績、金融、化学、交通、公務など7つの代表的な職場の350名の女子労働者を対象とする「働く婦人の意識調査」は、こうした背景のもとに実施されたのである。

調査は、アンケート調査とインタビュー調査を組み合わせから構成されていた。京都文教大学に寄贈された鶴見和子文庫のなかに、この時のフィールドノートが残されている。ここではフィールドノートに挟まっていたアンケート調査の項目とインタビュー調査の項目を概観したい。

アンケートの質問は、基礎調査、職場調査、戦争と平和、自分の将来、好きなものという5つの項目からなる32問であった（参考資料1）。インタビューの調査項目は大きく基礎と伝記に分類されており、伝記の項目では、インフォーマントの過去、現在、未来にわたる質問や、家族構成や職場の人間関係についての質問が含まれ、きわめておおまかにではあるが個人史が辿れるようになっている。また、戦争や政治に関する意見、結婚観や将来への思い、そして好きなものなど、質問は広範囲に及んでいる（参考資料2）。インタビュー項目を書いたフィールドノートの末尾に、「最後に自分の名

刺をわたして、わたしはこういう者ですが、今後ももしお役に立てることがあったら、お手紙をくださいということ」という、注意書きが書き添えてあった。このメモからも、この時の調査が、労働者へのサポートや労働者の啓蒙を目的としていたことがうかがわれる。

この働く婦人の意識調査の統計結果やインタビューによって、女子労働が「家計補助的労働」として位置づけられていることが実証された。女性たちの多くが、家に仕送りをし、またそうすることが期待され、家からの経済的独立を求めている。しかし、そうした女性労働の位置づけこそが、地主に高率小作料の口実をあたえ、会社に女子の低賃金と労働強化を正当化する口実をあたえ、女子の自分の生活に対する無頓着や、あらゆる面での判断と行動の自律性の欠如として現れるとともに、男子労働者の給料が家族全員の生活費に充たないという「寄せ集め家計」と女性の家への従属状況を支えることになるという悪循環をつくりだしていることが指摘されている^(注3)。

鶴見は、1949年から51年にかけて、同様の方法と質問項目を用いて、各地の製糸・紡績女工の実態調査を続けた。鶴見が働く婦人のなかでも製紙・紡績の女工に注目したのは、この職種が女性の賃金労働としてもっとも古い歴史をもち、また女子労働者の数がもっとも多い職場だからであった。この時期の京都府綾部の郡是製糸、東洋紡績忠岡工場、片倉製糸石原製作所、そして長野県下伊那郡のフィールドノートは、それから50年あまりたった今日、当時の製糸・紡績女工の生活実態の記録として、近代日本の女性史研究上貴重な資料となっている。

そのころすでに雑誌「思想の科学」などで活躍し評論家としての名声をえていた鶴見に、この時期、大きな転機が訪れた。1952年、鶴見は中津川で開かれた作文教育全国協議会に参加し、無着成恭ら生活綴り方教育を実践している教員たちと出会った。鶴見はそこで、人々の上に立って大衆の啓蒙を目指すエリート意識を反省し、学者たちの「客観的な実態調査」に何の意味があるのかと自問することになった。協議

会の会場で鶴見が語った「自己をふくむ集団」という言葉は、参加者の心をとらえ、またたく間に広まった。鶴見はその後、「今まで、自分のしたこと、考えたこと、書いたことが、いやでいやでたまらない。どこかおおもとのところで、ひどくまちがっていた、という感じでやりきれなく思っている」として、「日本の学者が、『日本』および『日本人』を論じるとき、それはあたかも、自分を含まざる集団として論じていたのだ」と批判した^(注4)。そして、「たかだか四、五日か一週間ほど、たとえば紡績工場にいて、現場や寄宿舎の状態をみたり、そこで働く娘さん達にあらかじめ用意してきた質問をして、統計をとってまとめた結果には、あまりにも網の目を漏れることが多かったのです。こうしたやり方では、私自身の物差しを他者におしつけ、その物差しからはみ出すものは取り逃がすことになります。しかもわたしの物さしからはみ出すところに、本当に大切なものがあるように思えました。私自身が、その生活の場に身をおかずに、ちがった生活をしていて、外側から分析し批判するだけでは、描かれた人たちにとっても、また描く自分自身にとっても、それぞれの行き方に、変化や影響をもたらない、ということもまた、私をやりきれなくしました」と述べている^(注5)。

その後、鶴見は近所の女工や主婦たちと「生活をつづる会」の活動を始めた。そしてこの実践が、鶴見の製糸・紡績女工のフィールド調査に新しい局面をもたらすことになった。

3. フィールド調査と実践活動の連携

生活記録運動の目的は、紡績女工や山の手や下町の主婦たちひとりひとりの具体的な問題を、「自己をふくむ集団」の問題としてみんなで一緒に考え解決しようと努力することによって、ともに自己を改造し、民主主義の時代にふさわしい「あたらしい女性」を目指すことにあった。女性たちがこうした共通の体験の場をもつことによって、それぞれの私小説的傾向を打破し、社会的な広がりをもった自己を形成することができると考えられた。鶴見にとって生活記録運動は、仲間たちからの厳しいエリート

批判を正面から受け止め、育ちのちがいという社会的な階級差をこえて人々とつながるための実践的な活動でもあったのである。

「生活をつづる会」の活動は、たんなる個人の綴り方から、集団創作という文学活動へ展開する可能性をもっていた。しかし、ふつうの女工や主婦たちにとって、それは簡単なことではなかった。それを鶴見和子という個人で試みたのが、1957年に発表された「女三代の記」であったといえよう^(注6)。「女三代の記」は、鶴見がこれまで製糸・紡績関係で集めたフィールド調査の資料をふまえて構想され、婦人公論編集部の協力によって得た新しい調査資料に基づいて、農村女性の生活史を創作文学という形でまとめた作品である。

京都文教大学には、鶴見がこの作品を作成するためにフィールドノートを整理した大きな模造紙が残っている。そこには5組の祖母、母、娘のライフヒストリーが時系列にならべられており、彼女たちの人生が、「女三代の記」のK紡績で働く土田ミヨとS製糸で働く深志ゆきの対話形式の語りに凝縮されていった製作過程がよくわかる。人類学者はフィールドワークの資料に基づいて民族誌を書くことによって対象社会の人々の生活を描きだすが、鶴見はフィールド調査の資料に基づいて、文学作品という表現形式をとおして日本の女性史を描きだしたのである。生活記録運動を実践する鶴見にとって、フィールド調査の対象である製糸・紡績女工は、エリートとしての自分が啓蒙する対象としての大衆ではなく、ともに新しい時代の女性像を探る仲間としての女性たちであった。鶴見は、彼女たちの問題を一緒に考え解決に向けて努力する実践的な活動の成果を、創作文学に結晶させたのである。

こうして、鶴見は初期の製糸・紡績女工のライフヒストリー調査と生活記録運動という実践活動を連携させながら、「自己をふくむ集団」の生きた生活史、すなわち近代における女性の職業の移り変わりの歴史や女性の生き方の発展史を描き出す方法論を模索していった。後に鶴見はアメリカで社会学を学ぶなかで、ライフヒストリー研究という分野が社会学においてすで

に確立していることを知った。しかしここで注目したいのは、鶴見のライフヒストリー調査は、いわゆる客観的な学問的な眼差しで他者のライフヒストリーを収集し分析するのではなく、あくまでも「自己をふくむ集団」の生きた生活史ないしは思想史を構築するための方法論だったということである。だからこそ、ライフヒストリーの聞き取りを中心とした鶴見のフィールド調査は、後期の水俣の調査研究によってさらなる展開をとげ、個人の内的発展と地域の内的発展の相互性に基づいた鶴見独自の内発的発展論の構築に寄与することになったのである。

結び 「価値としての共生」をめざすフィールドワーク

最後に、鶴見和子のフィールド調査を、文化人類学のフィールドワークという視点から見直して結びとしたい。

文化人類学は異文化を理解する学問として始まった。文化人類学のフィールドとは、したがって異文化すなわち他者の生活空間である。フィールドワーカーは、現地に生きる人々の生活に参加するという実践をとおして異文化を理解するとともに、改めて自文化を見つめ直す。文化人類学のフィールドとは、そこにおいて自己と他者が対峙し、その対立を越えて相互理解を深めることが目指される空間なのである。社会学者としての鶴見和子は、初期の調査への反省をへて、統計やアンケートによる量的な調査に満足することなく、調査とはそれをとおして調査者も調査される人々も変わってゆくような実践でなくてはならないと考えるようになった。鶴見和子のフィールド調査とは、自己と他者の対立を越えることをめざす実践に他ならなかった。その意味で鶴見和子のフィールド調査は、文化人類学のフィールドワークにきわめて近いところにあったといえよう。

鶴見は初期のフィールド調査の現場であった製糸・紡績工場に、エリート女性すなわち女工さんたちに対する他者として入った。しかし、やがてそうした調査を自己批判し、「生活を記録する会」の実践的活動をとおして、女工さん

たちとともに階級や男女の違いを超えた戦後の平等で民主的な社会における新しい女性像を模索した。言い換えれば、製糸・紡績工場というフィールドは、エリートと大衆、男と女が対峙する空間であった。鶴見は、この対立を越えることによって平等な民主主義社会の実現を目指したのである。鶴見が後に調査を行った水俣は、チッソという企業によって自然環境が大きく破壊された現場であった。水俣は、いわば自己としてのヒトと他者としての自然が対峙するフィールドであった。それはまた、開発と自然、国家と地域が対峙する空間でもあった。鶴見は、水俣病の被害者のライフヒストリーの聞き書きをとおして、ヒトと自然、開発と自然という対立を越えた生活様式の在り方を模索した。さて、鶴見の晩年のフィールドとなったのは、思うようにならない不自由な自己の身体であった。鶴見の晩年の学問は、この身体というフィールドにおいて、自己の意識と内なる自然としての自己の身体の対立をこえる生命の理論を模索するフィールドワークの成果ということができよう。それまでの、ライフヒストリーの聞き取りを軸とした鶴見のフィールドワークは、他者としてのインフォーマントの人生を理解するにとどまらず、その他者に共感し、他者とともに考えることによって、フィールドを自己と他者の「共生の空間」とすることをめざす実践でもあった。だからこそ、不自由な自己の身体をフィールドとした鶴見の晩年のフィールドワークは、人と自然、男と女、異文化間、異世代間の共生にまで広がる「価値としての共生」という壮大な思想の構築につながったのである^(注7)。

さて、翻って文化人類学は、フィールドワークをとおしてどこまで自己と他者の「共生の空間」を構築するための実践的な努力をしてきたであろうか。鶴見和子の研究は、内発的発展論や「価値としての共生」の思想はもちろんのこと、そのフィールド調査の実践だけをとりても、わたしたち文化人類学を学ぶ者に、「多元的な文化の共生」という文化人類学の基盤にある研究テーマを社会的な実践と結びつけて考えてゆくことの大切さを改めて考えさせるという大きな意義をもつものであるということがで

きよう。

注1)「わたしの仕事」、『思想の科学』、1996年
二月号「鶴見和子研究」、思想の科学社。（鶴
見和子曼荼羅Ⅰ『基の巻』、藤原書房、1997
年、pp.9-15.）

注2)『Social Change and the Individual: Japan
before and after Defeat in World War II』,
Princeton University Press. 1970.

注3)「生活記録以前—働く婦人の意識調査—」、
（『生活記録運動のなかで』、未来社、1957年、
pp.7-16.）。

注4)「生活綴方教育に学ぶ」、1952年、（『生活記
録運動のなかで』、未来社、1957年、pp.17-
21.）

注5)「話しあい 書きあう仲間」『エンピツをに
ぎる主婦』、1954年、生活をつづる会の文集
（鶴見和子編）、毎日新聞社。（『生活記録運動
のなかで』、未来社、1957年、pp.17-21.）。

注6)「女三代の記—製糸・紡績で働いた祖母と
母と娘—」、（『生活記録運動のなかで』、未来
社、1957年、pp.98-129.）

注7)「地球環境を考える—エコロジーの世界
観」、『日本ユネスコ運動全国大会（福島）報
告書』、1993年。（鶴見和子曼荼羅Ⅵ『魂の
巻』、藤原書房、1998年、pp.405-457.）

参考資料 1. アンケート調査項目

1. 基礎調査

- 1) 職種
- 2) 生年月日
- 3) 生地
- 4) 学歴
- 5) 勤続年限
- 6) 賃金総額、手取り
- 7) 家族と一緒に住んでいるか、自活か
- 8) 家族構成、家族の年令と職業
- 9) 家にお金を入れているか
- 10) 既婚未婚の別

2. 職場調査

- 11) 入社の経路
- 12) 職場でいやなこと、楽しいこと

13) いつまでここに勤めたいか

14) はやくやめたいと思う人はその理由

3. 戦争と平和

15) この前の戦争中は何をしていたか

16) 戦争による自分、家族、親しい人の被害

17) 戦争についてどう思うか

4. 自分の将来

18) 自分の将来で一番考えていること

19) どんな結婚：親が決めた相手か自分の好
きな人か

20) 希望する結婚相手の職業

21) 結婚後に仕事を続けるか

5. 好きなもの

22) 食べ物：何が好きか

23) 着る物：キモノと洋服どちらか、好きな
色

24) 家：どんな家に住みたいか

25) 映画：月に何回見る、いいと思う映画、
好きな俳優

26) 演劇、歌舞伎、新劇、ストリップで好き
なもの

27) 新聞：読んでいる新聞、一番先に読む欄

28) 雑誌：毎月決まってとっている雑誌、よ
く読む雑誌、どんなところをよく読むか

29) 本：本を読むのは好きか、今までで一番
よかった本

30) 尊敬する人物は誰か

31) この前の選挙に投票したか、どの政党に
いれたか

32) あなたの名前（これは決して人にみせま
せん）

参考資料 2. インタビュー調査項目

1. 基礎

- 1) 姓名
- 2) 職種
- 3) 年令
- 4) 学歴
- 5) 勤続年限
- 6) 賃金、手取り、（食費、税金）、月給袋
- 7) 生地
- 8) 家族の職業、家族の状況、収入

9) 仕送りをしているか、いくらか、家ではそれをあてにしているか

10) 宗教

2. 伝記

12) 肖像 人柄の印象、行動の特徴

13) その人についての他人の評価

14) 生家の家庭生活の特徴、両親、兄弟はどんな人か、誰に一番親しみを感じているか

15) 幼年期にとくに辛かったこと、楽しかったこと、どんな遊びをしたか

16) 子どもの頃の希望、どんな人になったか、希望は実現されたか、どんな子どもだったか

17) 学校時代、学科の中で何が好きだったか、スポーツ、遊び、手芸など、先生をどう思ったか、成績

18) 職歴、入社経路、目的、両親が進めたか、自発的か

19) 職場で辛いこと、楽しいこと、上役との交渉、仲間とのつきあい、寄宿舎でつらいこと、楽しいこと

20) 家にいるのと工場にいるのと、どちらが楽しいか

21) 戦争中はなにをしていたか、戦争はなぜおこったと思うか、

22) 敗戦をどう受け取ったか、どこで聞いたか、敗戦によって自分の考えがかわったか、戦争の自分に対する影響、

23) こんど戦争は起こるかどうか、それに対してどう思うか、自分の力でどうすればいいと思うか

24) 今後の日本をどうしていきたいか。それに対してあなた自身は無力ですか、どうすればよいか

25) 自分の将来について、現在いちばん心にかかっていることは何か

26) 結婚—どんな人と、どんな風に、仕事—結婚後の職業、独立の意志があるか

27) 将来の希望を実現するためには、どのようにしたらよいか

28) 自分の心にぴったりする人にあつたことがありますか、それはどういう人ですか

25) 自分の将来について、現在いちばん心にかかっていることは何か

26) 結婚—どんな人と、どんな風に、仕事—結婚後の職業、独立の意志があるか

27) 将来の希望を実現するためには、どのようにしたらよいか

28) 自分の心にぴったりする人にあつたことがありますか、それはどういう人ですか

29) 民主主義とはどういうことか、それはいいことか、すきか、きらいか

30) 天皇陛下について

31) 会社に対してどう思うか

32) 組合に対してどう思うか

33) どんなものがすきか

a. 食べ物

b. きるもの—その色合い

c. 住む家—台所についての話、自分自身の部屋がほしいか

d. 映画—これまで見た映画で好きなもの、どこがよかったか、一ヶ月に何回ぐらいゆくか、好きな女優、好きな男優

e. 歌—どんな歌をうたうか、好きな歌

f. 新聞—何新聞、どの欄をよむか、マンガ

g. ラジオ—聴くか聴かないか、どの番組を一番よく聴くか

h. 雑誌—何を、その部面を、なぜ

i. 本—どんな本を読むか、印象に残った本、なぜ

j. 尊敬する人物

34) 支持する政党

35) 人生のモットー

36) 人生の岐路にたつたことがあると思いますか、どんな場合に、どんな風に解決したか、今そうしたことをいいと思っているか